

〔A〕糸割符制度－テキスト P42 対応－

日本は日明貿易以来、中国から生糸を主要品目として大量に輸入していた。しかし、豊臣秀吉の行った朝鮮出兵(1592 年の文禄の役・1597 年の慶長の役)によって、日明間の国交は断絶状態にあったんだ。なおかつ、明は解禁政策(中国に朝貢する国以外とは貿易しない政策)を続けている。そのため、日明間の公的貿易は行われておらず、この時代に中国から直接生糸を購入するルートは乏しかった(中国の民間商船が日本に来航することもあるので、そこから生糸を購入するルートもあるが、その取引量は少ないため大量に購入することはできない)。

中国から直接貿易をするのが無理なのであれば、第三国に頼らざるをえない。その第三国の仲介役として、当時利益をあげていたのがポルトガルなんだ(ポルトガル・イスパニアが行う南蛮貿易は、中国から生糸・絹織物などを購入し、それを日本に売却する中継貿易の形態を取っていた)。ポルトガルの商人は白糸とよばれる中国産の生糸を中国から購入し、日本に売りにやってくるんだけど、生糸が欲しくてしょうがない日本人商人の足元につけ込んでくる。

①朝鮮出兵で国交断絶＝生糸の輸入が困難



〔ポルトガルの中継貿易〕

ポルトガル「だんな、中国産の生糸持ってきたぜ」

日本人商人「おお～～～！なかなか上質の生糸じゃないか。素晴らしい！」

ポルトガル「そうでやんしょ？こんな高級な生糸は他じゃ手に入りませんぜ」

日本人商人「ぜひ売ってくれ！いくらだ？いくら払えばいいんだ？」

ポルトガル「そうでやんすね～。相場は 1kg100 万円ってところでやんすかね」

日本人商人「それは高すぎる！！！」

ポルトガル「あつ、そうでんやんすか。なら、堺とか京都の商人も欲しがってますし、そっちに売るだけでやんすね」

日本人商人「えっ！待ってくれ、それも困る！」

ポルトガル「じゃあ、おたくはナンボで買います？堺の商人は 110 万円ぐらい出すそうですし、そっちに売っちゃった方がワイも儲かりますからな～。」

日本人商人「わかった、わかったよ。120 万円払うから俺に売ってくれ」

ポルトガル「まいどあり～。」

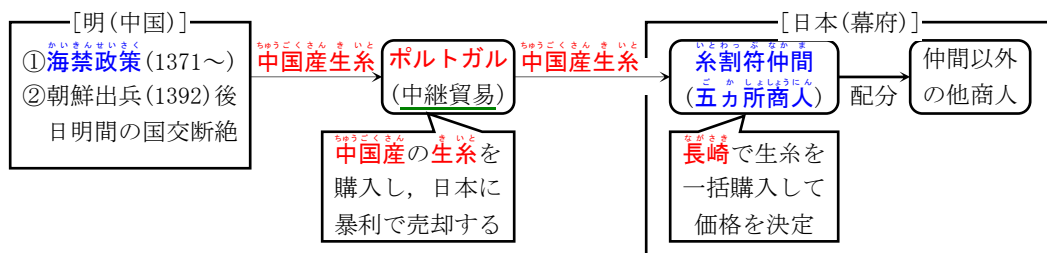
このように、毎回ポルトガルは価格決定の主導権を持っているため、日本の足元を見て値段を吊り上げてくる。これじゃあ、日本が損するだけだよ。そこで、江戸幕府がポルトガル商人による白糸(中国産生糸)の価格を抑制するために定めたのが **1604 年の糸割符制度**だ。

この糸割符制度の仕組みは、幕府が長崎・堺・京都など(のちに大坂・江戸が加わる)の直轄都市の特定商人に糸割符仲間という同業者組合を組織させる。簡単に言えば、糸割符仲間とは幕府から特権を与えられた商人グループってことだね。そして、彼らが一斉に長崎に出向いて、そこでポルトガル商人から生糸の値段を決定して一括購入するんだ。

今までポルトガルは各地で取引をすることで利益をあげてきたけど、これからは長崎で特定の商人としか取引できなくなると値段の吊り上げは出来なくなるでしょ？そして、生糸を買い取る値段も、糸割符仲間が一斉に購入することで価格を決定してしまう。つまり、ポルトガル商人が握っていた生糸の価格決定権を、幕府の糸割符仲間が価格決定の主導権を握れるようにしたわけだ。

糸割符制度を図解すると以下ようになる。

＜糸割符制度＞



そして、糸割符仲間が値段を決定したら、それを他の都市の商人などに公平な値段で配分(割符)してあげる(糸割符仲間は、その差額分を利益とする)。その糸割符仲間は、1604年の創設時には長崎・堺・京都の商人で構成され、のち1631年に江戸・大坂が加わったことで五カ所商人と言われるようになった(長崎・堺・京都のみの頃は三カ所商人と呼ばれた)。

＜五カ所商人の覚え方＞

「なが さ き、お えど」
長崎 堺 京都 大坂 江戸

Ⅳ 糸割符制度『糸割符由緒書』

黒船着岸の時、定置年寄共、糸のねいたさざる以前、諸商人長崎へ入るべからず候。糸の値相定候上は、万望次第に商売致すべき者也。

慶長九辰年五月三日

右の節、御定の題糸高

京 百丸、 堺 百式拾丸、 長崎 百丸

(黒船(ポルトガル船)が長崎に着いた時、年寄共(糸割符仲間)が、糸(中国産の生糸)の値段を決める前に、他の商人は長崎に入ってはならない。生糸の値段が決定したならば、自由取引しなさい。

慶長9年(1604年)5月3日

その時の、生糸の分配率

京都 100丸、 堺 120丸、 長崎 100丸)

〔B〕 朱印船貿易ーテキスト P42 対応ー

上記のように、日本は明(中国)との国交が断絶していたため、ポルトガルから中国産の生糸を購入していた。でも、ポルトガルという第三国を介すため、生糸の値段も割り増しになってしまう。それならば、中国の民間商人から直接購入すれば安上がりになるはずだ(明とは国交が途絶えているため公的貿易は出来ないが、中国の民間商人と取引する私貿易ならば可能である)。

ただし、その肝心の明(中国)は海禁政策をとっているため、中国国内で取引することはできない。そこで、日本の民間商人と中国の民間商人が、東南アジアなどの第三国で落ち合って取引をする出会貿易がとられるようになったんだ。

＜海禁政策＞

明では1371年から、中国民間人の海外渡航や民間貿易を禁じ、明に従属した朝貢国のみ貿易を認める海禁政策が採られていた。

この政策が採られた背景には、日本人を中心とした前期倭寇の存在があげられる。前期倭寇とは対馬・壱岐・肥前松浦などを拠点に、中国・朝鮮沿岸で食糧や人を略奪した日本人中心の海賊をさす。繰り返される倭寇の侵略に苦しめられていた明は、倭寇禁圧のため中国人の海外への渡航や民間貿易を禁じ、朝貢国のみ貿易を認める政策を行う。この中国人が海外に渡ることを禁じる政策を海禁政策という。

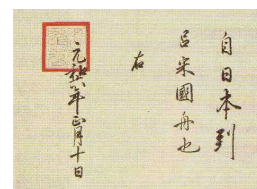
海禁政策がわかりづらい場合は、中国版鎖国と考えるとよい。江戸幕府の行った鎖国政策は、日本人が海外に渡ることを禁じ、オランダ・清という特定の国としか貿易を行わない。同じように、明の海禁政策は、中国人が海外に渡ることを禁じ、朝鮮・琉球など明に朝貢(従属)した国としか貿易を行わない。ゆえに、海禁政策は中国版鎖国と例えたのである(正確には、江戸幕府の鎖国政策よりも、明の海禁政策が先に行われたので、日本版海禁政策を鎖国という方が正しい)。

しかし、日本人を中心とした前期倭寇を取り締まるために行った海禁政策は、皮肉な結果を生むことになる。海禁政策により、中国では政府のみが貿易を行い、民間人は貿易をすることができなくなってしまう。だが、中国の民間人も貿易がしたい。そのため、密貿易を行う中国人が増加するようになる。彼らは日本人のフリをして中国沿岸で略奪をし、政府の目を盗んで密貿易を行っていた。このような中国人を中心とした海賊を後期倭寇という(後期倭寇は中国人(7割)・日本人(2割)・ポルトガル人(1割)で構成されるが、倭寇王と呼ばれた王直をはじめとして、ほとんどが中国人であった)。

このように、明では民間貿易を禁じた海禁政策による反動で、民間人による密貿易が増加していた。そこで、明は1567年に海禁政策を緩和し、中国人の海外渡航と貿易を認めるようになった(民間貿易を禁じるから密貿易が増加する＝それならば、民間貿易を認めれば密貿易を行う必要がなくなるという発想)。これにより、中国人が海外に渡ることができるようになったが、これは全面的解禁ではなく、日本への渡航は禁止されたままであった。

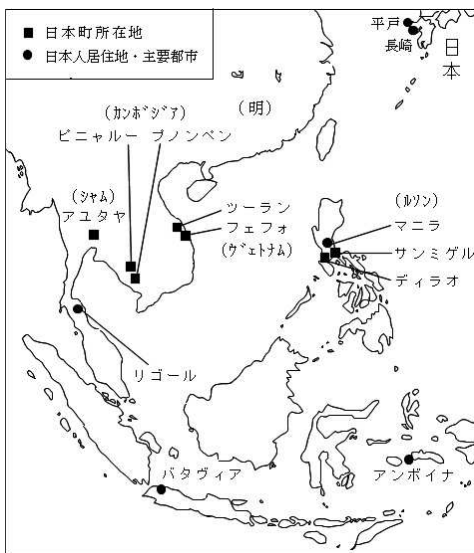
海禁政策の緩和により、中国民間人が海外に渡ることは認められたが、日本に渡ることは禁止されている。だから、中国人が日本に来ることはできないし、日本人が中国に行くこともできない。そこで、日本の民間商人と中国の民間商人は、呂宋(現在のフィリピン)・暹羅(現在のタイ)・安南(現在のベトナム)・カンボジア・マカオなどの東南アジアの都市で取引を行うようになった。こうした第三国で行われる貿易形態を出会貿易という。

なお、日本人が海外に渡航する際には、将軍が発行する朱印状という渡航許可状(パスポート)を必要とする。この朱印状を携えた朱印船が東南アジアなどに赴いて行う貿易を朱印船貿易という(朱印船貿易は、明の海禁政策が緩和されたことで、豊臣秀吉政権時から活発化していった)。



[朱印状]

つまり、朱印船貿易は日中間の貿易が形を変えて行われたものにすぎない。ゆえに、この朱印船貿易での輸入品は、中国産の生糸・絹織物など中国からの品物がメインを占めている(絹織物は生糸(絹糸)を使って織ったもの)。一方、日本から輸出されたものは銀・銅などで、銀に関しては、その日本の輸出額は世界の産出額の3分の1をも占めていたんだ(当時の日本の銀算出額は、石見の大森銀山や但馬の生野銀山などの開発によって、世界1位のメキシコに次ぐ世界2位の産出額を誇っていた)。こうした朱印船貿易で利益を上げた商人では、朱印船貿易家とよばれる京都の角倉了以・茶屋四郎次郎や、摂津の末吉孫左衛門、長崎の末次平蔵が有名だね(他にも九州の大名などが参加していた)。



〔朱印船貿易〕

朱印船貿易が活発化して、東南アジアで貿易をする商人が増えると、その地に住む日本人も増えてくる。日本で迫害されたキリシタンとか、金儲けを考えた庶民とかね。その結果、東南アジアの各地に、**日本町**という日本人の住むエリアが出来上がっていったんだ。

代表的な日本町としては、暹羅(現在のタイ)の首都**アユタヤ**、呂宋(現在のフィリピン群島最大の島)の**マニラ**、柬埔寨の**ブノンペン**・ピニャルー、交趾(現在のベトナム北部)の**ツーラン**・**フェフォ**、安南(ベトナム南部)の**東京**などがある(国名の漢字については選択問題でしか問われないので覚えなくてよい)。

マニラの日本町には 3000 人、アユタヤの日本町には 1500 人も日本人が住んでいたんだけど、この**アユタヤ**日本町の長であったのが**山田長政**。彼は、暹羅(現在のタイ)に攻め込んできたスペインを撃退したことで、暹羅(現在のタイ)の国王から厚い信頼を得るようになった。そして、のちに**六昆(リゴール)**という都市の太守(長官)に任命されている。

㊦ 朱印船貿易『長崎実録大成』

一、文禄ノ初年より長崎、**京都**、堺ノ者御**朱印**を頂戴して、広南、東京、占城、柬埔寨、**六昆**、太泥、暹羅、台湾、呂宋、阿媽港等ニ商売として渡海する事御免之有リ。……

(一、文禄元年(1592 年)頃より、長崎・**京都**・堺の商人が**朱印状**を受け取り、アンナン(ベトナム南部の安南)・トンキン(ベトナム北部のハノイ付近)・チャンパ(ベトナム南部)・カンボジア・**リゴール**(**アユタヤ**日本町の長から**山田長政**がリゴール太守に就任)・パタニ(マレー半島東岸中部の港)・シャム(タイ)・台湾・ルソン(フィリピン)・マカオなどに商売目的に海を渡ることが許されていた。)

〔C〕 紅毛人(オランダ人・イギリス人)の来航ーテキスト P42 対応ー

ポルトガル人・イスパニア人が^{なんばんじん}南蛮人と呼ばれたのに対して、オランダ人・イギリス人は髪や髭が赤いことから^{こうもうじん}紅毛人と呼ばれる。

1549年にキリスト教が日本に伝来した頃、ヨーロッパではオランダ・イギリスなどの新教(プロテスタント)が勢力を広げていた。そこで、ポルトガル・イスパニアなどの旧教(カトリック)は、アジアへと進出して布教を進めることで巻き返しを図ったんだ。

ポルトガル・イスパニアが日本に来航した背景には貿易の利益だけでなく、こうした旧教(カトリック)の勢いを盛り返したい意図があったわけだ。そのため、戦国大名が鉄砲・火薬などを購入するために貿易をしようとする、「貿易をしたいのであれば、キリスト教の布教を許可して下さい。布教の許可をしてくれなければ貿易はしませんよ」と要求をしてくる。しょうがないから、戦国大名はキリスト教の布教を許可することになる。つまり、ポルトガル・イスパニアとの南蛮貿易はキリスト教の布教と一体化して、貿易と布教は切り離せないものだったんだ。

一方、オランダ・イギリスなどの新教(プロテスタント)は、ヨーロッパで支持を集めているので、日本でキリスト教の布教を推し進める必要がない。だから、「我々(オランダ・イギリス)は貿易だけでいいですよ。キリスト教の布教はしませんから」というスタンスを取っていた。つまり、オランダ・イギリスとの貿易は、キリスト教の布教と切り離すことができる。ゆえに、キリスト教を禁止したい幕府にとって、新教国(オランダ・イギリス)は歓迎すべき貿易相手国だったんだ。

<旧教(カトリック)・新教(プロテスタント)>—

南蛮人(ポルトガル人・イスパニア人)＝旧教(カトリック)…貿易と布教は切り離せない(一体化)
紅毛人(オランダ人・イギリス人)＝新教(プロテスタント)…貿易と布教は切り離せる(別々)

↳ 幕府は歓迎(キリスト教は幕府よりも宗教を優先させるため禁止したい)

さて、これで旧教(カトリック)と新教(プロテスタント)の違いがわかったと思うけど、戦国時代に日本にやってきていた国は旧教国(ポルトガル・イスパニア)だけだから、江戸幕府は新教国(オランダ・イギリス)のスタンスは知らない。だから、徳川家康も「キリスト教は神の前では皆平等とか言いやがって、江戸幕府の士農工商とか全否定しているから、キリスト教は禁止したいんだよね。でも、キリスト教の布教は許可しないと貿易できないからな〜、認めざるをえないか…。」と、初期はキリスト教を黙認しなければならなかった。

そんな中 **1600年**、偶然にも**オランダ**の**リーフデ号**という貿易船が^{ぶんごのくに}豊後国(現在の大分県)の臼杵に漂着した。そこで、その船に乗っていた乗組員で**オランダ人**の航海士**ヤン＝ヨーステン**と、**イギリス人**の水先案内人**ウィリアム＝アダムズ**から話を聞いてみたら、「うちら(イギリス・オランダ)は貿易だけで十分っす。キリスト教の布教はしませんから」って言うもんだから家康は大喜び！オランダ・イギリスは新教(プロテスタント)だし、キリスト教の布教にはこだわってないからね。

なお、この後2人は^{とくがけいさく}徳川家康の絶大な信任を得て外交顧問となり、日本に住むようになって日本名ももらっている。江戸に屋敷をもらったヤン＝ヨーステンは^{てんぎょう}耶揚子と呼ばれ、これがなまって現在その地は八重洲と呼ばれるようになったと言われる。ウィリアム＝アダムズは相模三浦半島の三浦郡に土地をもったので、^{みづうみ}三浦按針と名乗るようになった(按針は航海士を意味する)。

こうして両国は、オランダが**1609年**に、イギリスが**1613年**にそれぞれ**平戸**にオランダ商館・イギリスを開いて、日本と貿易するようになる。

ただし、これはオランダ・イギリスと国交が結ばれたというわけではない。オランダ商館・イギリス

ス商館は、**バタヴィア**(現在のインドネシアのジャカルタ)という場所を貿易拠点としていたオランダ**東インド会社**と、カルカット・マドラス・ボンベイなどを貿易拠点としていたイギリス東インド会社がそれぞれ設立したもの。つまり、オランダ東インド会社とイギリス東インド会社というアジア貿易を行っていた会社が、日本支部として平戸に設立したものがオランダ商館・イギリス商館だったということだ(東インド会社はインド・東南アジア貿易をになった特許会社で、イギリス・オランダ以外にもフランス・デンマーク・スウェーデンなどの東インド会社がある)。

㊦ イギリス船の来航『異国日記』

一、**いきりす**より日本へ、今度初めて渡海の船、万^①商売方の儀、相違無く仕るべく候。渡海仕るに付てハ、諸役免許せしむべき事。

一、**江戸に於て望の所二屋敷**之を遣すべき間、…

慶長十八年八月廿八日

(一、**イギリス**から日本へ、今回初めて海を渡ってきた船について、貿易は万事、問題なく行って良い。海を渡ってきたものについては、関税も免除する。

一、**江戸で希望の場所に屋敷**(イギリス商館は江戸に設置予定だったが実際には**平戸**に置かれた)を与える間、……)

慶長 18 年(1613 年)8 月 28 日

こうして新教国(オランダ・イギリス)との貿易が開始されたわけだけど、この両国の登場は江戸幕府にとって非常に意義のあるものだった。なぜなら、今までは旧教国(ポルトガル・イスパニア)の存在しか知らなかったから、**はじめ幕府は貿易のためにキリスト教の布教を黙認せざるをえなかった**けど、新教国(イギリス・オランダ)であればキリスト教の許可 or 不許可に関係なく貿易できる。つまり、新教国の来航によってキリスト教を禁止することができる条件が整ったわけだ。そこで、キリスト教の信仰を禁じる**禁教令**を**1612 年**に**天領(幕府の直轄領)**内で、さらに翌年の**1613 年**には**全国**に発布したんだ。

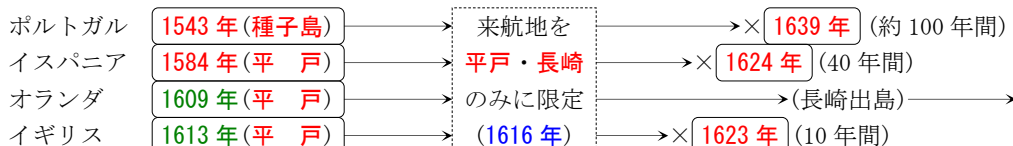
＜禁教令(1612)の覚え方＞
「**広い日**(1612)本に禁教令」

ところが、この禁教令でキリスト教は禁止と命じたのに、**高山右近**というキリシタン大名は「絶対にキリスト教はやめねえ」って棄教しようとしなかった。それなら、そいつらは日本から追放しちまえばいい。そこで、1614 年に高山右近をはじめとしたキリシタン 300 名を**マニラ**に追放したんだ(これをキリシタン国外追放という)。

このように、キリスト教に対して厳しく弾圧しているにもかかわらず、キリスト教徒はいっこうに減らない。そのため、見せしめとして 1622 年には長崎でキリスト教の信仰をやめない信徒・宣教師 55 名を全員処刑している(これを**元和の大殉教**という)。

さて、話を外国船の来航に戻そう。江戸時代になってオランダとイギリスが来航するようになったけど、以前から来航してきていたポルトガル・イスパニアを含めると全部で 4 カ国になってしまい、整理がつきづらい。なので、いったんこれらを以下のようにまとめてみよう。

＜外国船の来航＞



各国が日本に初めて来航した年 or 商館を設置した年を整理すると上記のようになる。こうしてみると「鉄砲が伝来(1543)してからポルトガルとの貿易は約 100 年間」、「イスパニアとの貿易は 40 年間」、「イギリスとの貿易は 10 年間」とまとめることができるよね。特に、以下の語呂で押さえておけば、イスパニアが 1584 年に来航してから、スペイン語が日本で使用されていたのは 40 年間になるので、来航した年(1584)年に 40 年をプラスすれば来航が禁止された年(1624)年も一緒に覚えることができる。

＜各国の来航にかかわる年号＞

ポルトガル…「以後予算(1543)きついで鉄砲伝来」

イスパニア…「スペイン語は4(1584)0年」(この40年後の1624年にイスパニア船の来航が禁止される)

イギリス……「トムの父さん(1613)イギリス人」(この10年後の1623年にイギリスは商館を閉鎖する)

ただ、このように各国が来航するようになると、幕府はキリスト教とのつながりを警戒しなければならない。それぞれ外国船がいろいろな港に来航すると、その地域の日本人と接点が出来てしまい、キリスト教が広まってしまう可能性があるからね。それだったら、キリスト教と接触する可能性をなくすために、外国船が来航できる港を限定しまえばいい。そこで、1616年に中国船を除く外国船が来航して良い港を長崎・平戸だけに限定したんだ(中国船はキリスト教と関係がないので来航地を限定されなかった)。

＜外国船の来航地限定の覚え方＞

「いろいろ(1616)来るなよ、長崎・平戸だけな」

こうして外国船の来航は長崎・平戸だけとなった。長崎(長崎県南西部)は幕府の直轄都市であるから、幕府の長崎奉行が管理すればいい。一方、平戸(長崎県北西部)は松浦氏が治めていた城下町だけど、オランダ商館・イギリス商館が設置された場所なので来航を禁止することはできない(のちにオランダ商館は 1641 年に長崎出島に移されることになり、松浦氏の藩財政は打撃を受けた)。

＜鎖国政策の目的＞

この 1616 年の時点で幕府が鎖国政策を始めていることになる。なぜなら、外国船が来てもいい場所は長崎・平戸だけとなったので、それ以外の地域には外国船は来航できない＝「国を鎖している」ことになるよね。では、なぜ幕府はこのように鎖国政策を行ったのだろうか？

＜鎖国政策の目的＞

①キリスト教を禁止するため(キリスト教の広まりを防ぐため)

②幕府が貿易利益を独占するため(西国の外様大名を抑制するため)

一つ目の目的はキリスト教の禁止。キリスト教が広まらないようにするためには、外国人が日本各地にやって来られないようにしてしまえば手取り早い。それから、もう一つの目的は幕府による貿易利益の独占。今まで西国大名は南蛮貿易によって利益を得ていた。このまま彼らに貿易を続けさせると、特に外様が多い西国大名が勢力を強めてしまう。だったら、彼らが貿易をできないようにして、幕府だけがおいしい思いをしまえばいい。そのため、1641 年にはオランダ商館を平戸から、幕府の直轄領である長崎出島に移して、幕府が貿易利益を独占できるようにしている。

幕府にとって歓迎すべき国は新教国のオランダとイギリス。ところが、この両国はもともとアジア貿易の主導権をめぐる争っていたんだ。そして、1623 年に起きたアンボイナ事件という貿易競争でイギリスが敗れたため、イギリスは 1623 年に平戸のイギリス商館を閉鎖し、日本から撤退してしまった(アンボイナ事件とは、1623 年にインドネシア東部にあるアンボイナ島で、オランダがイギリス商館を襲撃し、商館長・商館員を拷問・虐殺してイギリス勢力を駆逐した事件。これ以降、イギリスは東南アジアから手を引き、インド進出に専念した)。

〔D〕 イスパニアとの交渉－テキスト P42 対応－

南蛮貿易を日本と行っていた国はポルトガルとイスパニア。でも、ポルトガルは糸割符制度などでもたびたび登場してきたのに、イスパニアについてはやたら影が薄いよね。これは 1596 年に起きた **サン＝フェリペ号事件** が関係している。

―＜サン＝フェリペ号事件＞―

豊臣政権時の **1596 年**、**イスパニア船** の **サン＝フェリペ号** が **土佐** の浦戸に漂着した。五奉行の一人 **増田長盛** が調査奉行として土佐に派遣され、「イスパニアはペルー、メキシコ、フィリピンなどを武力制圧してきた歴史がある。日本でもそれを行うために、測量に來たのに違いない。これは都にいるポルトガル人 3 名から聞いた。」という秀吉の書状を告げた。そして、増田長盛らサン＝フェリペ号の積荷と船員の所持金をすべて没収してしまう。

これにキレたサン＝フェリペ号の乗組員が「どうせこの日本もフィリピンのように、俺らに占領される運命にあるんだよ！」という暴言を吐いてしまった。この乗組員の発言を機に、秀吉はキリスト教が日本征服を企図しているとの疑いをもち、キリシタンを迫害し始める。

そして、このサン＝フェリペ号事件を契機に、京都・大坂で布教をしていた宣教師を捕らえ、1596 年に長崎で **フランシスコ会** 宣教師や信徒 26 名を処刑した（フランシスコ会はイスパニア系のカトリック修道会、イエズス会はポルトガル系の修道会であり、背景にはイエズス会とフランシスコ会の対立もあった）。これを **26 聖人の殉教** という。

このサン＝フェリペ号事件以降、イスパニアとの関係は断絶状態にあった。でも、「ポルトガル・オランダ・イギリスもいるんだから、イスパニアにこだわる必要はないんじゃないの？そもそも、イスパニアって旧教（カトリック）国だし、貿易を続けたらキリスト教もくっついてきちゃうじゃん」、…という声もチラホラ聞こえてきそう。

いや～、それでも徳川家康はイスパニアとの関係を修復したいと考えていたんだ。その理由は、イスパニアとの貿易よりも、イスパニアが植民地としている **ノビスパン**（現在の **メキシコ**）という存在に注目していたから。ノビスパン（現在のメキシコ）はイスパニアの植民地であったけど、この当時のメキシコは銀採掘の最新技術を導入していて、銀の産出額が世界 1 位だったんだ。一方、日本の銀の産出額は世界 2 位。それならば、日本もその最新技術を導入したいよね。

そんな中、1609 年にルソン臨時総督（ルソンは当時スペインの植民地）の **ドン＝ロドリゴ** ってオッサンが、メキシコに行く途中で嵐に巻き込まれて、日本の上総に漂着してきた。これはグッドタイミングだね。そこで、ドン＝ロドリゴをメキシコに送り届ける名目で、1610 年に **徳川家康** は **田中勝介** という **京都の商人** を同乗させ、**ノビスパン**（イスパニア領 **メキシコ**）に派遣して交渉を求めたんだ（田中勝介は太平洋を横断した最初の日本人となる）。

しかし、メキシコではあまり歓迎されず、翌年の 1611 年にメキシコ副王の答礼使 **ビスカイノ** と一緒に帰国してくる。そして、ビスカイノ曰く「う～ん、我がメキシコは今イスパニアの植民地なんで、勝手には許可できないんで無理っす。」ってはぐらかされちゃったんだ。

でも、諦めないで。まだ希望はある。ちょうどこの時期、フランシスコ会の宣教師 **ルイス＝ソテロ** という人物が、イエズス会に対抗するために東北地方でキリスト教の布教を進めようとして、仙台藩主 **伊達政宗** と面会していた。そのルイス＝ソテロが「それなら、今度は本国のスペインに行って直接交渉しましょう」って勧めてきたので、仙台藩主の **伊達政宗** は、仙台藩士の **支倉常長** を貿易要請のためにヨーロッパに派遣することにしたんだ（この使節を **慶長遣欧使節** と言う）。これはヴァリニャーニの勧めで派遣された、伊東マンショ・千々石ミゲルなどの天正遣欧使節とは違うので気をつけてね。

なお、これは伊達政宗が独断で行ったものではなく、徳川家康が裏で糸を引いている（慶長遣欧使節の帆船建造にあたったのは、1611 年にノビスパンから徳川家康のもとに派遣されたビスカイノ配下の船匠と、幕府の船大工だったことなどから、幕府の関与も認められる）。

その支倉常長はイスパニアの植民地ノビスパンを経て、イスパニア本国に赴いてイスパニア国王（フェリペ 3 世）に謁見している。そして、洗礼名フェリーペ・フランシスコという洗礼名をもらい、キリスト教に改宗までして貿易をしたいことを伝える。

国王「ちょ www おまつ www 洗礼受けたん？www」

支倉「あ、はい…。」

国王「ぶぶぶ www (^ω^)」

支倉「え…、何で笑ってるんですか？」

国王「お前さ～、うち(イスパニア)と貿易したいんでしょ？」

支倉「そ、そうです…。」

国王「うち(イスパニア)が、キリスト教の布教と貿易を一体化していることは知ってる？」

支倉「も、もちろんです。」

国王「ふ～ん。じゃあ、うち(イスパニア)がキリスト教を禁止する国とは貿易すると思う？」

支倉「…え？」

国王「ほら、今って 1613 年だろ？でも、日本って 1612 年に禁教令って出してるよね？」

支倉「し、知ってたんですか？」

国王「もちろんね。」

支倉「じゃ、じゃあ何故洗礼まで受けさせたんですか！？」

国王「ノリじゃね？」

支倉「……(˘˘)」

上記のように、既に幕府の禁教令(1612)によるキリスト教禁止政策が、イスパニアにバレてしまっていたため失敗。ということは、イスパニアとはもはや交渉の余地はないね。そのため、幕府は **1624 年にイスパニア船**の来航を禁止して、イスパニアとの国交は断絶することになったんだ。

〔E〕鎖国政策の徹底ーテキスト P42 対応ー

江戸幕府は禁教政策を徹底するために、1616 年に外国船の来航地を平戸・長崎に限定し、さらに 1624 年にはキリスト教との関係が強いイスパニア船の来航を禁止することで、鎖国政策を推し進めていった。でも、鎖国政策を展開していく中で矛盾しているものが一つある。それが朱印船貿易だ。

朱印船が渡航した代表的な都市には、ルソン(現在のフィリピン)のマニラがあげられる(マニラはイスパニアのアジア貿易の拠点地)。ということは、そのマニラに赴いた日本人が現地でキリスト教徒になってしまう可能性もあるし、それらの地域から宣教師などが密入国してくるかもしれない(実際、将軍の発行する朱印状を偽造して、宣教師が潜入してくるなど密入国は絶えなかった)。

そこで、朱印状の偽造や密入国を防止するため、朱印船の統制が強化される。それが 1631 年から開始された**奉書船**制度だ。今までは将軍の発行する渡航許可状の朱印状を必要としていたけども、これからは**老中**の発行する渡航許可状の**奉書**も持っていなければならない。つまり、朱印船の強化バージョンが奉書船ってことだ(なお、奉書船制度が開始された 1631 年には、糸割符制度が中国にも適用されている)。

<朱印船・奉書船>

①朱印船…将軍の発行する朱印状を必要とする

②奉書船…将軍の発行する朱印状＋老中の発行する奉書を必要とする

1631 年から奉書船制度を開始した上で、これ以降鎖国政策の徹底化が図られていく。その第一弾が **1633 年(寛永10年)**の鎖国令①「**奉書船**以外の日本船の海外渡航禁止」だ。これは、奉書船以外の日本船は海外に渡航してはならないことと、海外に住んでいた日本人が日本に帰国してきた場合は死罪とするというもの(ただし、やむをえない事情があつて海外に滞在し、**5 年**以内に帰国した場合は調査の上無罪とする)。

㊦ 寛永十年(1633 年)鎖国令－奉書船以外の渡航禁止－『武家厳制録』

- 一、異国え**奉書船**の外、舟遣すの儀、堅く停止の事。
- 一、**奉書船**の外、日本人異国へ遣し申す間敷候。……
- 一、異国え渡り住宅仕り之有る日本人来り候は、死罪に申し付くべく候。ただし、是非に及ばざる仕合之有りて、異国ニ逗留いたし、**五年**より内ニ罷帰候者ハ、穿鑿を遂げ、日本にとり申すべきに付きてハ御免併 異国え亦立帰るべきにおゐては、死罪に申し付くべき事。
- 一、異国舟につみ来り候**白糸**、直段を立候て、残らず**五ヶ所**へ**割符**仕るべきの事。

寛永十年二月 廿 八日

- (一、異国へ**奉書船**以外の船を派遣することは厳重に禁止する。
- 一、**奉書船**以外で、日本人を異国に派遣してはならない。……
- 一、異国へ渡航してそこに住居をもった日本人が帰国したならば死罪とする。ただし、やむをえない事情があつて異国に滞在し、**5 年**以内に帰国した者は調査の上日本に住む場合は無罪とする。しかし、異国へまた立ち戻る場合は死罪に処する。
- 一、異国船が積んできた**白糸**(中国産の上質の**生糸**)は、値段を決定してすべて**五ヶ所商人**(**長崎・堺・京都・江戸・大坂**の商人)に**割符**(分配)するようにせよ。

寛永十年(1633 年)2 月 28 日

でも、奉書船のみの海外渡航を許可しても、その海外でキリスト教にハマってしまう可能性も少なからずある。そこで、**1635 年(寛永12年)**に鎖国令③「**日本人の海外渡航禁止・海外在住の日本人の帰国禁止**」を出して、日本人が海外に渡航することと、海外に住んでいる日本人が帰国することを全面的に禁止したんだ(鎖国令②は鎖国令①とほぼ同じ内容なので省略した)。つまり、これによって**奉書船(朱印船)の海外渡航も禁止になり**、完全に日本人は海外に出られなくなったわけだ。

㊦ 寛永十二年(1635 年)鎖国令－日本人の渡航禁止－『教令類纂』

- 一、異国え日本の船遣すの儀、堅く停止の事。
- 一、異国え渡り住宅仕り之有る日本人来り候ハ、**死罪**申し付くべき事。

寛永十二年

- (一、異国へ日本の船を派遣することは厳重に禁止する。
- 一、異国へ渡航して住みついてた日本人が帰国したならば**死罪**に処する。

寛永十二年(1635 年))

また、**1636 年**には鎖国令④「**ポルトガル人の子孫の追放**」で、ポルトガル人の子孫(ポルトガル人と日本人との混血人)の国外追放が行われているが、これは早慶レベルの知識になる。

㊦ 寛永十三年(1636 年)鎖国令－南蛮人子孫の追放－『徳川禁考令』

- 一、**南蛮人の子孫**残し置かず、**詳**ニ堅く申し付くべき事。
- (一、**南蛮人(ポルトガル人)**の子孫は日本に残り置かないように詳細に厳しく申し付けるものである。)

このような鎖国政策・禁教政策の徹底が行われていく中で、1637年に起こったのが島原の乱だ。これは、肥前国(長崎県)島原・肥後国(熊本県)天草地方の3万7000ほどの農民が、天草(益田)四郎時貞を首領に原城跡に立てこもった、キリシタンを中心とする農民一揆である。

＜島原の乱が起きた背景＞

肥前国(長崎県)島原・肥後国(熊本県)天草地方は、もともとキリシタン大名の有馬晴信・小西行長の領地であったため、キリシタンが多かった。しかし、両者がそれぞれ所領没収・処刑されると(有馬晴信は1612年の岡本大八事件に連座して流罪となり切腹させられ、小西行長は1600年に関が原の戦いで西軍に属して敗れ斬首された)、島原領主は松倉氏、天草領主は寺沢氏に代わった。

この島原・天草地方はもともと米の収穫量が少ない地域であったため、南蛮貿易による利益で財源を確保していた。しかし、1616年に外国船の来航地が平戸・長崎に限定されたことで、その他の地域では貿易による利益を得ることが出来なくなってしまった。もちろん、島原・天草地方もその一つであるため、藩財政に苦しむようになった松倉氏・寺沢氏は領民に過酷な年貢を課すようになった。

島原地方では松倉重政・勝家(1630年に重政から家督相続)父子、天草地方では寺沢広高・堅高(1633年に広高から家督相続)父子による過酷な年貢の収奪がそれぞれ行われた。また、領内に多かったキリシタンへの弾圧も残酷なものであった。こうした重い年貢の取り立てに苦しんだ農民がキリシタンと団結して蜂起することになったのが島原の乱であった。

島原の乱を鎮圧するため、板倉重昌を総大将として幕府は12万の大軍を派遣した。ところが、この板倉重昌は戦いの経験がほとんどなかったため、1月1日に「総攻撃〜！」と自分で突っ込んで行って戦死してしまう。そのため、彼に代わり「知恵伊豆」と呼ばれた松平信綱が総大将として指揮をとることになった(松平信綱は政治手腕に非常に優れ、官職が伊豆守であったことから「知恵伊豆(出づ)」と呼ばれた)。

3万7000もの一揆軍はイエズス会に頼って、南蛮国から援軍が来ると信じて、立てこもりを続けている。そんなところに総攻撃を仕掛けても幕府軍の被害が大きくなるだけである。そこで、松平信綱は兵糧攻めをとることにした。そして、その上でオランダに依頼して、艦船から大砲をぶっ放してもらう。この目的は、ヨーロッパの艦船から砲撃させることで、ヨーロッパからの援軍を信じる一揆軍の希望をぶち壊し、絶望の底に突き落とすため。こういう精神的なダメージというのは、戦において非常に大きいからね。やがて、敵の兵糧が底をついているかを確認するため、一揆軍の戦死者の腹を裂かせる。そして、草や海草しか食べていないことを確認すると、総攻撃を仕掛けて見事に鎮圧することに成功したのだ。なお、一揆軍で生き残った1万5000人は見せしめのために死刑とされ、乱の後、天草四郎の首級と称するものがいくつも本陣にもたらされたため、幕府は生首を並べ、天草四郎の母親に本物を特定させたという。

島原の乱はあくまでも圧政に耐えかねた農民たちが起こしたものだけど、キリスト教の脅威を象徴する事件だ。しかも、島原の乱が鎮圧された後も、ポルトガルからは密かに日本にやって来る宣教師などが跡を絶たない。そして、そうした隠れている宣教師や信者のもとへ、ポルトガルから物資が送られてきているという。それならば、キリスト教との関係があるポルトガルの来航を禁止するしかない。こうして、1639年の鎖国令⑤「ポルトガル船の来航禁止」によって、「かれうた」と呼ばれたポルトガル船の来航は全面的に禁止されることになった。

＜鎖国令の覚え方＞

さ(3)…「ほう(奉書船)」

こ(5)…「日本人は(日本人の渡航禁止)」

く(9)…「ポルノ禁止(ポルトガルの来航禁止)」

㊦ 寛永十六年(1639年)鎖国令ーポルトガル船の来航禁止ー『御当家令条』

一、日本国御制禁成され候 吉利支丹宗門の儀、其趣を存知ながら、彼の法を弘むるの者、今に密々差渡るの事。

一、宗門の族、徒党を結び、邪儀を企つれば、則 御諫罰の事。

一、伴天連同宗旨の者隠れ居所え、彼の国よりつゝけの物送り与ふる事。

右茲に因り、自今以後、かれうた渡海の儀、之を停止せられ訖。此上若し差渡る二おみてハ、其船を破却し、并乗來る者速に斬罪に処せらるべきの旨、仰せ出さる者也。仍執違件の如し。

寛永十六年卯七月五日

(一、日本国が禁止しているキリシタン(キリスト教)について、その趣旨を知りながらキリスト教を広める者が今でも密かに日本へやって来ている。

一、キリシタンの信徒達が徒党を組んで、(島原の乱のような)良からぬことを企てれば直ちに処罰する。

一、パテレン(宣教師)と信徒の隠れている所へ、彼の国(ポルトガル)から仕送りの物を与えている。

右の理由によって今後、かれうた(ポルトガル船)の来航はこれを禁止する。これ以後来航してきた場合は、その船を破壊し、乗組員は即座に処刑される旨、(幕府が長崎奉行・西国の大名へ)命じられた。よって、このように通達する。

寛永十六年(1639年)7月5日)

ポルトガルの来航が禁止されことによって、オランダのみが日本に来航するようになる。でも、そのオランダ商館が置かれているのは平戸で、この地は幕府の直轄領ではなく肥前松浦氏の領土。そこで、1641年にオランダ商館を平戸から長崎の出島に移して、幕府だけが貿易利益を独占できるようにしてしまう(同年の1641年にはオランダにも糸割符制度が適用されている)。こうして、寛永期(3代将軍徳川家光の頃)に鎖国が確立されることになったんだ。ただし、完全に国を鎖してしまうと、世界の情報などが何一つわからない状況になっちゃうよね。そこで、オランダ商館長(カピタン)に1年に1回将軍に挨拶に来させて、海外の情報を報告させるようにしたんだ。これをオランダ風説書という。

最後に、これまで鎖国政策という言葉が多用してきたけど、実はこの17世紀(1600年代)には「鎖国」という言葉は存在しなかったことを知っておいてほしい。実は、「鎖国」という言葉が生まれたのは19世紀(1800年代)のこと。

1690年にオランダ商館の医師として、ケンペルというドイツ人医師が長崎にやってきた。彼はオランダ商館長の江戸参府に付き従った時の体験をもとに、帰国後に日本の歴史・政治・社会・地理などを『日本誌』に著した。のちに、これが日本に逆輸入され、蘭学者で長崎通詞(オランダとの通訳)の志筑忠雄が翻訳することになった。そして、文中の「日本は国を鎖している」という言葉から、彼は「鎖国論」と題して1801年に出版したんだ。こうして、この時期に「鎖国」という言葉が生まれることになった。

つまり、「鎖国」という言葉が使われるようになったのは19世紀から。だから、17世紀の頃に「鎖国」という言葉はそもそも存在せず、1633年～1639年に発布された「鎖国令①～⑤」は、後世につけられた法令の総称にすぎない。なので、入試問題では「鎖国令」という語句は問われず、その内容が出題される。

〔F〕長崎貿易－テキスト P43 対応－

鎖国とは言っても、日本は完全に国を鎖しているわけではない。長崎奉行の監視の下、長崎ではオランダ・中国との貿易が行われているので、長崎だけは唯一開かれた窓口となる。幕府は、この長崎でオランダ・中国との貿易を行い、その利益を独占している。これを長崎貿易という。

長崎に来航して幕府と貿易を行っていた国はオランダ・中国の2つ。オランダは1581年にイスパニアから独立して、バタヴィアを拠点とするオランダ東インド会社が日本との通商を担っている(オランダ国王と徳川将軍の間での公的な付き合いはないため、国交は結ばれておらず、オランダ東インド会社との貿易が行われている)。一方、中国は明が1644年に滅亡して清に代わったものの、豊臣秀吉の頃からずっと国交は結ばれておらず、中国の民間商人が長崎に来航して貿易が行われている(徳川家康は琉球を介して明に国交回復を申し出たが拒否された)

＜明の滅亡(1644)＞

中国は50近くの民族から構成される多民族国家として知られている。中国の主要民族である漢民族が9割ほどを占め、満州民族(女真族)・モンゴル民族・チベット民族・ウイグル民族などが少数民族にあたる。その漢民族の朱元璋が1392年に建国した国家が明であった。しかし、豊臣秀吉の朝鮮出兵や清との戦争によって国力を消耗し、明は1644年に滅亡した。

その明を滅ぼしたのが、中国東北部の女真族(1635年に民族名を満州民族に改める)によって1616年に建国された清である(明の滅亡後、台湾などを拠点に清軍と交戦し、明の復興をめざした鄭成功は、近松門左衛門の『国姓爺合戦』のモデルとして日本でも知られる)。つまり、清という国は、わずか300万人ほどの少数民族の満州民族が、3億人ほどの漢民族を支配していたのである(中国の習俗として知られる辮髪は、満州民族が支配者の象徴として漢民族に強要したもの)。

長崎貿易においては、中国産の生糸・絹織物・書籍、ヨーロッパ産の綿織物・毛織物、南洋産の砂糖・蘇木・香木・皮類などが輸入品としてもたらされ、日本からは金・銀・銅・海産物(俵物)などが輸出された。ただし、この輸出入品については朱印船貿易とほぼ同じ輸出入品になるので、朱印船貿易の輸出入品を押さえていれば、覚える必要はなくなる(朱印船貿易は日中間の出会い貿易で、長崎貿易におけるオランダも日中間の中継貿易を主としているので、輸出入品はほとんど変わらない)。

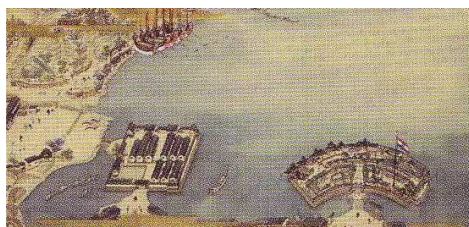
これら中国・オランダからの輸入品の大部分は中国産生糸が占めている。これまではポルトガル商人がもたらす中国産生糸の価格抑制のため、糸割符仲間が長崎で一括購入して価格を決定する糸割符制度が適用されていた。しかし、ポルトガルとの取引の減少に伴い、中国・オランダ商人との取引が増えるようになった。そして、当然のことながら、中国・オランダの商人も生糸の価格を吊り上げようとしてくるため、中国には1631年、オランダには1641年にそれぞれ糸割符制度を適用した。

このように、これまでは糸割符仲間が生糸を一括購入して価格を決定していたが、1655年に糸割符制度が廃止されると(中国船の積載量を調節した価格操作や、糸割符制度が持っていた輸入量の確保や価格の抑制、仲間による商人統制などの役割が機能しなくなったことが糸割符廃止の原因といわれる)、売り手と買い手の間で価格が決定される相対自由貿易となった。つまり、売り手(中国・オランダ)と買い手(日本)が当事者同士で直接値段を決めて売買をするようになったわけである。

しかし、ここで問題になってくるのは取引品だ。オランダ・中国商人から生糸を購入すればするほど、日本商人は金・銀などで支払う(オランダには金で、中国には銀で支払うことが多かった)。そのため、日本の金・銀を求めたオランダ船・中国船の来航が激増して、多くの銀が日本から流出してしまっただ。

これはさすがにまずい。そこで、これ以上銀が日本から流出しないように、**1685 年に糸割符制度を復活**させて、さらに年間の取引額に制限をかけたんだ。具体的には、**清船**の場合は年間で銀 **6000 貫**までの額しか取引をしない、**オランダ船**の場合は年間で銀 **3000 貫**までの額しか取引をしないよ、ということ。この金・銀の海外への流出抑制をはかるために設けた、長崎貿易の取引高制限を**定高貿易仕法**という。

貿易額を制限されたとしても儲けたいのが商売人。そのため、**抜荷**と呼ばれる密貿易がかえって増えてしまったんだ。当時のオランダは長崎出島に閉じ込められて外出も認められていないのに対し、中国商人は長崎市内ならどこでも宿泊できて取引をすることができた。そのため、彼ら中国商人による密貿易が増加してしまったわけだ。そこで、**1688 年**に清船の来航を年間 **70 隻**までに制限して、さらに密貿易防止のため、翌年の 1689 年には**唐人屋敷**という中国人の収容施設を設けたんだ。これは、オランダ人収容のために設けられた人工埋め立て地の出島と同じように、中国人もその唐人屋敷に収容して、そこから外出できないようにしてしまったんだ。つまり、オランダ人は出島に隔離されて、中国人は唐人屋敷に隔離されたってことだね(なお、この出島や唐人屋敷には、日本の商人以外は出入りすることが許されていなかったが、唯一遊女の出入りは認められていた。そして、オランダ人の中には、本気で遊女のことを好きになってしまい、失恋して自殺してしまったオランダ人もいる。また、その有名なオランダ商館ドイツ人医師のシーボルトも、お湊という遊女との間に娘が生まれている。その娘の楠本イネはのちに村田蔵六(のちの大村益次郎)からオランダ語、オランダ海軍医の**ポンペ**(内務省衛生局長となった**長与専斎**らを輩出)などから医学を学び、日本初の女医となっている)。



〔唐人屋敷(左)・出島(右)〕

年間の貿易額を制限しても、取引は毎年少なからず行われるので、日本からは金・銀が出ていく。では、一体どれぐらいの金・銀が日本から流出したのだろうか？これを 6 代徳川家宣・7 代徳川家継の侍講(將軍の家庭教師)として仕えた新井白石が計算してみたところ、江戸時代初期から換算すると、**金は 4 分の 1**、**銀は 4 分の 3**も海外に流出してしまっていたそうだ。

日本には金・銀以外の輸出品も特にないので、貿易額・隻数の更なる制限を加えるしかない。そのため、**新井白石**によって **1715 年**に出されたのが**海船互市新例**だ(**長崎新例(令)**・**正徳新例(令)**ともいう)。「舶」と「例」の漢字は間違えやすいので特に気をつけてね。これは、**金・銀の流出を抑制するため**、清・オランダの日本に來航する船の数、貿易取引額の限度額を設定したものなんだけど、具体的には以下ようになる。

清船はこれまで 70 隻の來航が認められていたが、これにより年間 **30 隻**までしか來航できないようになり、**銀高 6000 貫目**(22.5 t)までの取引が認められた。一方、**オランダ船**は年間 **2 隻**までしか來航できないようになり、**銀高 3000 貫目**(11.25 t)までの取引が認められた。つまり、取引は銀で行い、それぞれの制限量を超える分は取引しませんよ、ってことだ。ただし、銀の流出を抑えるため、これらのうち一部は**銅**で支払われる(清船は銀 6000 貫のうち銅 300 斤で支払い、オランダ船は銀 3000 貫のうち銅 150 斤を支払う)。

しかし、その後この銅の産出額が減少し、銅でも支払うのもキツくなってしまった。そこで、その後は銅に代わる輸出品として、中国向けに**俵物**という海産物が奨励されるようになった。俵物とは**いりこ**(海鼠を煮干したもの)・**ほしあわび**(鮑を干したもの)・**ふかのひれ**(鯨のひれ)を俵に詰めた物のことで、中国宮中の高級料理として提供された(また、これまで輸入品の主要品目を占めていた中国産生糸は、18 世紀以降に和糸(国産生糸)の増産により輸入が激減していった)。

〔G〕 周辺地域(朝鮮)－テキスト P43 対応－

豊臣秀吉の行った朝鮮出兵のせいで、国交断絶という最悪の関係になってしまったのが朝鮮だ。そりゃあ、攻め込まれた当事者の国からすれば、仲良くなんかはできないからね。

ところが、日本と朝鮮の国交がないため、苦しくなってしまったのが対馬藩の宗氏だ。対馬といえ、島という土地柄、農業には適さない不毛な地。だから、財政的な不足を補うため、室町時代の頃から朝鮮との貿易によって利益を上げてきた。そんな状態で、朝鮮との国交が断絶して、朝鮮と貿易できなくなったら、もう生活していけない。そのため、朝鮮に使者を派遣して、死ぬ気で日朝間の国交回復に力を注ぐんだ。

対馬藩「日本では豊臣秀吉が死んで、政権が徳川家康さんに代わったんすよ。だから、日本との国交を回復していただけませんか？」

朝鮮側「まあ、それはいいんだけどさ～。ただし、条件があるのよね。」

対馬藩「じょ、条件とは？」

朝鮮側「そもそも今回の件は日本側から攻め込んできたのが原因じゃん？だったらさ、まずは日本側から手紙を送ってくるべきだと思うんだよね。あと、朝鮮出兵の時に、朝鮮国王の墓荒らしをした奴がいるのよ。だから、その犯人差し出してや。」

かなり無茶な要求だけど、対馬藩も背に腹は替えられない。こうなったら、手段を選ばずにやるしかない。1つ目の家康から朝鮮へ国書を送る件については、勝手に家康からの国書を書いて偽造。さらに、2つ目の朝鮮国王の墓荒らしの犯人引渡しについては、対馬の罪人を墓荒らしの犯人として朝鮮側に引き渡した。これはすごいよね。バレたら大目玉を食らうどころじゃ済まないのに、ここまでやるなんて(国書偽造については、のちに柳川事件という対馬藩の御家騒動の過程で、国書改竄の事実が明るみに出てしまうが、1635年に徳川家光の親裁により許されている)。

朝鮮側も対馬藩の対応を評価して(国書偽造してるけど)、1607年に回答兼刷還使という使節を江戸幕府に派遣した。この「回答」とは、家康からの国書に対する返答という意味で(国書偽造してるけど)、「刷還」とは、朝鮮出兵時に日本に連行された朝鮮人捕虜の返還を指している。この回答兼刷還使は3回かけて朝鮮人捕虜を朝鮮に連れ帰ったので、4回目からは朝鮮通信使という名称に変更され、以降は徳川将軍の代替わりごとに朝鮮国王から派遣されるようになった(朝鮮通信使は徳川家斉の11代将軍就任に対馬で聘礼した1811年までに、計12回来日した)。

さて、国書の偽造という件はひとまず置いておいて、対馬藩宗氏の努力で、朝鮮出兵のせいで途絶えていた日朝間の国交は回復した。そのため、徳川家康も対馬藩を評価して、朝鮮との貿易を行う独占権を与えたんだ。つまり、幕府は朝鮮と国交を結んでいるが貿易は行わず、貿易は対馬藩の宗氏に任せたということ。だから、対馬藩の宗氏と朝鮮の間で貿易に関する取り決めが結ばれる。それが1609年に対馬藩の宗氏と朝鮮の間で結ばれた己酉約条(日本側では慶長条約という)。これは、朝鮮と幕府の間で結ばれたものではないことと、室町時代の1443年に朝鮮と対馬宗氏の間で結ばれた癸亥約条(日本側では嘉吉条約という)と間違えやすいので注意してほしい(特に「己酉」と「癸亥」の漢字は間違えやすい)。

この条約によって、対馬からの蔵遣船(対馬から朝鮮へ派遣される貿易船のこと)は年間20隻までに限定され、貿易のため倭館という貿易・接待施設が釜山に設けられた(倭館は室町時代の癸亥約条で塩浦・富山浦(のちの釜山)・乃而浦に設置され、1510年の三浦の乱や豊臣秀吉の朝鮮出兵により閉鎖・中断されていたが、1609年の己酉約条により釜山に再設された)。

なお、朝鮮語・中国語に通じ、対馬藩に仕え、朝鮮との外交にあたった人物として、木下順庵の弟子の雨森芳洲がいる。彼は、のちに朝鮮通信使の扱いをめぐって、同じく木下順庵の弟子である新井白石と対立したことで知られている。

〔H〕 周辺地域(琉球・沖縄)－テキスト P43 対応－

琉球・沖縄については、特別に原始・古代～中世までの歴史と一緒に説明していこうと思う。いきなり、江戸時代の話をしてしまうとついて来られないからね。

—＜原始・古代～中世の琉球・沖縄(テキスト P29 対応)＞—

原始時代のはじめが旧石器時代であるというのは知っているよね。気候的には氷河時代という非常に寒い時代で、当時の人々はナウマン像や大角鹿などを捕まえて、それらを食べていた。そして、この旧石器時代は今とは違って「日本列島」と「中国大陆」が陸続きになっていたんだ。

ところが、1万2000年頃から気候の温暖化が始まって、各地の氷が溶けていった。そうすると、湖水が溶けた分だけ海水の量が増加するから海面が上昇する。その結果、何と100m近くも海面が上昇したんだ。そうすると、この陸続きの部分で、海拔が低いところは海になっていくよね？そして、今現在の日本列島が形成されていったんだ。

まあ、何を言いたかったかというと、縄文時代に日本列島が形成されていったわけだけど、旧石器時代には日本列島は中国大陆とつながっていた。だから、中国大陆の南に住んでいた人々の中で、日本列島に移住してきた人々がいたんだ。その旧石器時代の化石人骨として、**沖縄県**で見つかったのが**港川人**。そして、この湊川人は中国大陆南部の**柳江人**と特徴がめちゃめちゃ似ている。だから、中国大陆南部の柳江人で、沖縄にやってきたのが港川人なんじゃないかって言われているんだ。

この後、本州では弥生時代になると稲作が始まったよね。ところが、本州の弥生時代の時期になっても沖縄では稲作は行われなかったんだ。なぜかという、沖縄の周りを見てみればわかるけど、海に囲まれてるでしょ？だから、魚介類がたくさんいるので、その貝や魚を採っているだけで普通に生活できるんだよね。そのため、稲作は行われず、縄文時代と同じような狩猟採集文化が続いたんだ。この沖縄で続いた狩猟採集文化を**貝塚文化**、もしくは**南島文化**と言う。

このように、沖縄は時代が進んでも縄文時代と同じで、魚や貝を捕って暮らしてるだけだから文字も誕生しないし、文献なんて何も残ってないんだ。ところが、奈良時代に当たる時期に、一回だけ沖縄が歴史に登場する。

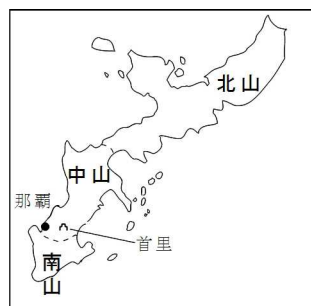
奈良時代には、唐から日本にある坊主がやってきたよね。その人物は、日本に戒律を伝えるためになんと5回も失敗して、6回目にようやく日本にやってくることが出来た。ところが、その来日に失敗する過程で、沖縄の那覇に漂着しているんだ。…それが有名な**鑑真**くんだ。この鑑真が沖縄に漂着したことが、**淡海三船**という人物が書いた鑑真の渡航日記『**唐大和上東征伝**』という書物に記されている。

こうした琉球の状況は、その後もずっと変わらないで、魚介類を食べて生活する貝塚文化が続いていた。ところが、ちょうど12世紀になると、この琉球に外来文化との接触が訪れる。ちょっと難しい言葉で言っただけ、簡単に言えば、日本とか中国とかの人々が琉球にやってくるようになる。そして、今まではなかったヒトとかモノとか情報などがいっぱい伝わってくるんだ。

こうした日本や中国文化の影響を受けたことによって、ついに琉球でも各地に豪族たちが登場するようになった。その豪族たちのことを**按司**とって、彼らが各地に造っていった城のことを**グスク**っていうんだ。そもそも、琉球でグスクを漢字で書くと「城」という字になるしね。

そして、彼ら按司たちが勢力を拡大・防衛するために、各地で争うようになっていったんだ。つまり、琉球版の小規模な戦国時代に突入したと思ってくれるといいかな。

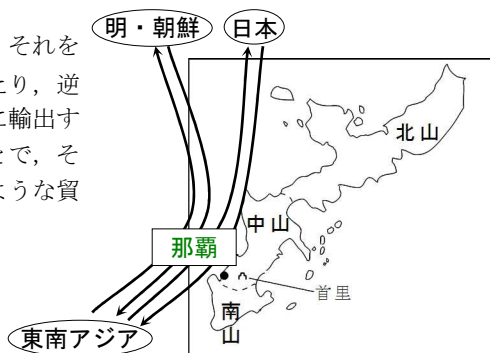
この按司たちが各地で争った結果、最終的に3勢力の按司が残った。それが南山・中山・北山の3勢力の按司だ。一応、右側の地図で確認しておきな？



そして、この中山から出た尚巴志が、ついに1429年に琉球を統一して、自分がその王様となった琉球王国を建国したんだ。なお、この琉球王国の王府(首都と同じ)は首里という都市に定められたんだけど、その首里にある首里城の正門を何て言うか知ってるかな？沖縄に修学旅行で行った子とかなら知ってると思うけど、守礼門って言うんだ。最近はずっと見ることなくなったあの2000円札の裏に描いてあるのが守礼門だもんね。なお、これ常識。

こうして成立した琉球王国だけど、この地には一つの問題点がある。それは経済的に恵まれた地ではない、ということだ。でも、経済的に恵まれた地ではないけど、地理的には恵まれた地だよな？琉球は日本にも中国・朝鮮にも近いし、なおかつ東南アジアにも近い。それだったら、これを利用しない手はないでしょ？

そこで、東南アジアから珍しい商品を輸入して、それを那覇港を仲介・経由して日本や明・朝鮮に輸出したり、逆に日本・明・朝鮮から輸入した商品を東南アジアに輸出するようになったんだ。こうした仲介・経由することで、その中間マージンをゲットして儲けたわけだ。このような貿易の形態を中継貿易という。



でも、こうした日本・明・朝鮮⇄東南アジアと貿易するわけだけど、この当時の明ってそんな簡単に貿易できたっけ？

この当時の明は倭寇(日本の海賊)対策のために、中国に服属した国としか貿易せず、中国民間人の海外渡航を禁止する、中国版鎖国というべき海禁政策を敷いていたよね。だから、琉球が明と貿易するためには、明に服属しなければいけない。そこで、明の冊封を受け入れて服属することになったんだ(正確には、既に三山時代の時から他の南山・北山と共に明に服属していたんだけどね)。だから、この時期、琉球王国は明に服属していたわけだね。

この琉球王国を建国した尚巴志の後、子供の尚徳という人物が跡を継いだんだけど、家臣の内間金丸と意見が合わなくて、結局クーデターを起こされて政権を奪われてしまった。そして、その内間金丸が王に即位して、新しく尚円と名乗ったんだ。だから、よく「尚」巴志のつくった尚氏と「尚」円のつくった尚氏とを区別するために、「尚」巴志の第一尚氏と「尚」円の第二尚氏とか言うんだけどね。まあ、この辺の内容はまったく聞かれないからホント暇だったら覚えてくれる程度でいいよ。

まあ、とりあえずクーデターはあったけど、これで琉球も落ち着いたね。そして、この尚氏の琉球王府によって、琉球で歌われていた歌謡を集めて編集されたのが『おもろさ(そ)うし』だ。

さて、中世以降、琉球王国は中国に服属していたわけだけど、その一方、日本では1603年には徳川家康が征夷大将軍に任命されて江戸幕府が成立した。そこで、薩摩藩の島津氏が琉球に対して連絡をとってきたんだ。

島津氏「おうおうおう、日本では家康様が取ったんだよ。だからよ、琉球王国も家康様に朝貢せんかい、こらあ」

琉球「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。私たち琉球は今までずっと明に朝貢していたんですよ？だから、明を裏切る形になりますし、家康様に朝貢なんて無理っす。」

島津氏「……おうおうおう、そんなこと言っちゃうの？じゃあ、家康さんに言っちゃうからよ。ちょっと待ってな」

島津氏「家康さへん、琉球が朝貢に応じないんで、ブッ倒していいっすか？」

家康「おう、ええよええよ。やっちゃいな。」

島津氏「了解っす。じゃあ、琉球に侵略してきやす！！」

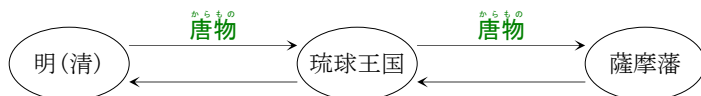
…ということで、1609年、薩摩藩主の島津家久が琉球に攻め込んで征服しちゃったんだ。そして、この時の琉球国王であった尚寧を薩摩藩に連行して、琉球を日本(薩摩藩)に服属させることを了承させた。…ということは、琉球は中国に服属しつつ、今度は日本(薩摩藩)にも服属するわけだね。だから、これを日本と明の両方に服属するってことで日明両属体制って言うんだ(後に明が滅び清に変わると、日清両属体制という)。

これによって、薩摩藩は幕府に認められた形で、琉球を服属させるわけだけど、そんなんでもいいのかな？薩摩藩からしてみれば、琉球は自分たち薩摩藩だけでなく、中国にも服属しているわけでしょ？そんな二股みたいなことを許しておいていいのかな？

実はこれでいいんです。琉球を中国に服属させたままにしておけば、琉球は中国と貿易することができるよね。そして、薩摩藩はその琉球と貿易しているわけだから、中国からの商品を横流ししてもらえるでしょ？

この当時、中国との貿易は幕府が長崎で独占していたから、一般の諸大名は中国の唐物(中国商品の総称)をゲットすることはできなかった。でも、こうして琉球を利用すれば、幕府にバレずに中国の唐物を手に入れることができるわけだ。つまり、薩摩藩は琉球を中国に朝貢させることで、中国の唐物などを輸入する密貿易を行っていたんだ。

＜薩摩藩の琉球を介した中国との密貿易＞



まあ、こうして琉球王国は中国だけでなく日本(薩摩藩と幕府)にも服属することになった。そのため、日本に服属することになった琉球王国は、これ以後将軍の代替わりごとに慶賀使を、琉球国王の代替わりごとに謝恩使を幕府に派遣することになったんだ。なお、この違いで混乱する子がいるけど、普通にそれぞれの使者の意味を考えれば、混乱することはない。慶賀使は「この度、江戸幕府の将軍が代わりましたね。ご就任おめでとうございます」と「慶賀」しに行く使者であり、謝恩使は「この度、琉球国王が代わりました。毎回わたくしたち琉球の支配を認めていただきありがとうございます」と「謝恩」しに行く使者だからね。

〔Ⅰ〕周辺地域(蝦夷・北海道)－テキスト P43 対応－

蝦夷・北海道についても、原始・古代～中世までの歴史と一緒に説明していこう。

－＜原始・古代～中世の蝦夷・北海道(テキスト P29 対応)＞－

弥生時代になると、本州では稲作が行われるようになったよね。でも、北海道は寒冷で稲作に適さないし、そもそもサケとかマスとか魚介類も豊富なため、農耕を行わない縄文時代の延長線上である狩猟採集文化が続いたんだ。この本州の弥生時代の時期に、北海道で続いた狩猟採集文化を続縄文文化という。よく沖縄の貝塚文化と混同する子がいるけど、沖縄は周りを海に囲まれているから貝塚が豊富なわけだし、少し考えれば間違えることはないよね。

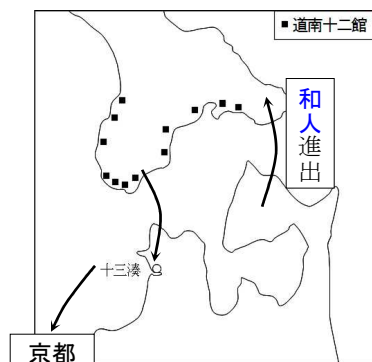
7世紀までは、続縄文土器という縄文土器と変わらぬ土器が使用されていたけど、7世紀以降になると、それが改良された擦文土器というものを使用されるようになった。そのため、7世紀以降北海道で栄えた文化を擦文文化というんだ。ただし、北海道北部のオホーツク海沿岸では、独自の文化が栄えていたので、それはオホーツク文化というんだけどね。

つまり、古代の北海道ではずっと縄文時代の文化が続いていたわけだね。

ところが、14世紀以降になると、貿易の利益を求めて、津軽半島に勢力を持っていた安藤(東)氏の支配下であった本州の人々が蝦夷ヶ島(当時の北海道の呼び名)に進出してきた。もともと北海道にはアイヌ人が住んでいたけど、彼らアイヌ人からしてみれば、本州の人々は別の民族だよね。だから、彼らから見た日本人のことを和人なんて言うんだ。

そして、彼ら和人がアイヌ人たちと貿易するために、渡島半島の南部に館と呼ばれる居住地を建設していったんだ。ちなみに、右の地図の点がついてる位置が館の建設された場所なんだけど、全部で12個ある。この北海道の南部に造られた12個の館を総称して道南十二館という。ちなみに、この十二館の一つが箱館(のちの函館)だったりするんだけどね。

こうしたアイヌとの貿易で得られた魚介類など珍しい商品は、いったん十三湊に運ばれ、この十三湊から日本海を通じて京都などに送られた。



でも、この和人ってアイヌとまともな商売しないかったんだよね。毎回不正な取引ばかりするんだ。そして、しまいにはアイヌ人の鍛冶屋に作らせた刀の切れ味が悪いという理由で、アイヌの青年が和人にブツ殺されるという事件が起きてしまった。これには、今までずっと我慢していたアイヌもブチ切れた。この事件をきっかけに、**1457年**、アイヌの首長であったコシャマインがアイヌを率いて一斉に蜂起したんだ。これをコシャマインの戦い(蜂起)という。

この蜂起によって、道南十二館は次々と落とされていったんだけど、上之国の蠣崎氏のもとにいた客将武田信広によって射殺された。そして、この後武田信広は蠣崎氏の養子となって、この蠣崎氏を継ぎ蝦夷地を支配する大名となったんだ。

このコシャマインの乱の後、蝦夷地を治めていた蠣崎氏は江戸時代に松前氏と改称したんだけど、彼ら松前氏には一つ問題点があった。

古代のところでも述べたけども、この蝦夷地(北海道)では米がとれなかったよね？だから、松前氏は、アイヌとの貿易をしなければ経済的にやっていくことができなかったんだ。

そこで、松前藩は徳川家康に「私たちの住む蝦夷地は米がとれません。ですので、江戸幕府が他国との貿易を禁じているのは知っていますが、私たち松前藩には例外的にアイヌとの交易権を認めてください」とお願いしたんだ。その結果、**松前藩**は家康から**黒印状**という許可状で、アイヌとの交易独占権を認められ、本来石高はゼロなものの**1万石の大名扱い**された。

でも、今述べたように、松前藩では米がとれないわけだよね？じゃあ、家臣にはどうやって知行(給料)を支払ってあげればいいんだ？って話になってくる。そこで、家臣に対して「お前達に知行(給料)を支給したいけど、ここ北海道では米がとれないから米を支給することはできない。そこで、給料の代わりに、アイヌと貿易する権限をお前達に与えるから、お前等はアイヌと貿易してそこで利益をゲットして来い」と命じたんだ。この給料の代わりに、家臣にアイヌとの交易権を与える制度のことを**商場知行制**という。

そして、その家臣たちはアイヌの住む地域に**商場**という交易地域を設けて、アイヌと交易するようになった。でも、この家臣たちがアイヌとまともに取引すると思う？前のコシャマインの戦いの時にもそうだったけど、まともにするわけないよね。だから、また不正取引ばかりしていたんだ。その結果、毎回毎回こういった不正ばかりしていたから、とうとうアイヌの総首長であるシャクシャインが怒って、**シャクシャインの戦い(蜂起)**が起きてしまったんだ。

最終的に、このシャクシャインが松前藩と東北の**津軽藩**に謀殺されたことによって鎮圧されたんだけど、もうアイヌとの交易を家臣に任せておくのは無理だよね？また不正取引を行って、反乱が起きちゃったらまずいでしょ。そこで、このシャクシャインの乱の後に採用したのがその**場所請負制**というものだ。これは、今までの**商場(場所)**における取引を、家臣ではなくて商人に任せて、その一部を松前藩に納めさせるというもの。やっぱ、商売は専門の商人に任せた方がいいってことだね。

これによって、今度は商人がアイヌと交易するんだけど、この商人の登場によって貨幣による取引が蝦夷地でも浸透するようになった。だから、この貨幣経済に巻き込まれて、商人たちに借金するアイヌがどんどん増えていく。そして、その借金のためにアイヌたちは和人商人の下で働かされ、酷使されるようになったんだ。

ここまで説明したら、また同じ展開になるのは予想つくよね。その後、和人商人の酷使にブチ切れたアイヌが怒っちゃって起きたのが**クナシリ・メナシの蜂起**だ。これはクナシリ(国後)・メナシ(目梨)地方で起きた130人のアイヌの反乱。でも、結局これも松前藩によって鎮圧されちゃいましたとき。

＜アイヌの反乱の覚え方＞

「こしやくなアイヌ」

コシャマイン→シャクシャイン→クナシリ・メナシ

[J] 四つのローテキスト P43 対応ー

最後にまとめよう。江戸時代は鎖国と呼ばれるが、完全に国を鎖していたわけではない。**幕府はオランダ・中国と国交を結んではいないが、長崎で貿易を行っていた(これを長崎口という)**。このような国交は結んでいないが、貿易(通商)関係の国を**通商国**という。

また、朝鮮からは將軍の代替わりごとに**朝鮮通信使**が来日し、琉球からは將軍の代替わりごとに**慶賀使**、琉球国王の代替わりごとに**謝恩使**が来日する。このような**幕府が国交を結んでいた朝鮮・琉球は通信国**と呼ばれる(アイヌは国ではないので含まれない)。そして、これらの国と幕府は貿易を行っていないが、朝鮮との貿易は**対馬藩(対馬口)**という、琉球との貿易は**薩摩藩(薩摩口)**という、アイヌとの貿易は**松前藩**がそれぞれ担当していた(**松前口**という)。

こうした鎖国体制の中で開かれていた窓口の、長崎口・対馬口・薩摩口・松前口をまとめて**四つの口(四口)**という。